# 蜻蛉日記全注釈

上巻

柿本奨

角川書店

日本古典評釈・全注釈叢書

蜻蛉日記全注釈　上巻
全二冊

昭和四十一年八月二十日　初版発行
昭和四十八年三月三十日　四版発行

著作者　柿本奨
発行者　角川源義
印刷者　中内佐光
製本者　鈴木俊一
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
振替口座東京一九五二〇八
電話東京(四)七二一一(大代表)

Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替え致します　暁印刷・鈴木製本
3395—761005—0946(1)

# はしがき

蜻蛉日記といえば、すぐに、難解ということばが、はねかえってきそうである。難解感をいだかせる最大の原因は、本文にある。どの現存伝本にも、誤写による欠陥が多い。

その本文を、もとの形にもどそうと試みながら、読むことは、契沖以来なされてきた。それら先学の研究により、現在ではだいぶん本文上の障害が取り除かれたが、まだまだ残されたものが少なからずあるように思う。

本文整定も注釈の一側面と見得るが、それも含めて、一般に注釈上、この作品は、問題が多い。読みようによっては、語彙だけでなく、事実の認識についても、変ってくる個所もある。この日記研究の現段階の中心は、注釈にあるといってよいだろう。

蜻蛉日記は、いろいろな意味で、重要な作品であることは確かであり、注釈が固まってゆくに従って、ますますその重要さが明らかになるに違いないと思う。それだけに、今後も多くの人々によって、読みこんでゆかねばならないが、その際、このつたない書が、なんらかの意味で、多少なりともお役に立つことができるならば、この上もないさいわいと思っている。

本書は、披見されると瞭然たるごとく、先学諸氏や文庫・図書館から多大の恩恵を受けており、原田芳起氏ら大阪国文談話会中古部会の方々の口頭によるご教示に助けられたことも少なくない。そして、わたくしの蜻蛉日記研究の頭初より、玉上琢彌博士からかたじけなくしてきた学恩とご厚意とは、最も深く感銘する

ところである。それに、角川書店側の尽力があって、本書を成すことができたのである。衷心感謝の意を表する。

ただ一つ残念なことは、たえずご支援くださった山脇毅博士が、一昨年他界され、ついに本書をお目にかけられなかったことである。

本書の誤や不備については、ご批正をお願いするしだいである。

昭和四十一年七月

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

はしがき　一
凡例　八
蜻蛉日記上　三
一　序　一三
天暦八年
二　求婚（夏）　二〇
三　兼家の手紙（同）　二六
四　文通（秋）　三一
五　結婚（同）　三四
六　垣穂のなでしこ（同）　三七
七　しぐれる空（九月）　三九
八　返すころも（十月）　四一
九　父の離京（同）　四三
一〇　横川の雪（十二月）　四八
天暦九年
一一　出産（一月―八月）　五一
一二　疑い（九月―十月）　五三
一三　町の小路の女（十月以降）　五五
天暦十年
一四　桃の花（三月）　六〇
一五　姉の別居（三月―四月）　六三
一六　時姫と歌の贈答（五月）　六六
一七　秋色（六月―七月）　六八
一八　倒るるに立ち山（七月―八月）　七〇
一九　小弓の矢（同）　七三
二〇　夜長うして（同）　七五
二一　網代の氷魚に（九月―冬）　七七
天徳元年
二二　跡をとどめぬ浜千鳥（春―夏）　八〇
二三　町の小路の女の出産（夏）　八二
二四　女の着物（七月―八月）　八五
二五　嵐の中の花すすき（八月）　八七
二六　花の露・寝待の月（同）　八九

二七　野分の後の日（同）　九二
二八　しいたる人（十月）　九四
天徳二年
二九　町の小路の女の悲境（―七月）　九五
三〇　長歌贈答（七月）　九八
（天徳三年・同四年・応和元年記事欠）
応和二年
三一　兵部大輔（―五月）　一一七
三二　兵部卿の宮（五月）　一一九
三三　宮と歌の贈答（五月―六月）　一二三
三四　女手の手紙（六月）　一二六
三五　山寺へ（六月―冬）　一三〇
応和三年
三六　斎院のみそぎの日（一月―四月）　一三三
三七　宮の薄（四月―六月）　一三四
康保元年
三八　ひぐらしの初声（春―夏）　一三七
三九　曇り夜の月（夏）　一三八
四〇　母の死（七月）　一四一
四一　みみらくの島（同）　一四六
四二　故　宅（七月―八月）　一四九
四三　袈　裟（八月）　一五三
四四　雲林院の法師の死（八月以降）　一五五
康保二年
四五　母の一周忌（一月―七月）　一五七
四六　琴のすさび（七月）　一六〇
四七　姉の離京（九月）　一六二
四八　姉への思慕（同）　一六四
康保三年
四九　兼家病む（三月）　一六六
五〇　兼家邸へ（同）　一七一
五一　葵祭の日（四月）　一七八
五二　五月の節（四月―五月）　一八一
五三　蓬　生（五月―八月）　一八四
五四　ゆするつきの水（八月）　一八六
五五　稲荷詣で（九月）　一九〇
五六　賀茂詣で（九月―十二月）　一九四
康保四年
五七　かりの卵（三月）　一九九
五八　村上帝崩御・登子を慰める（五月―六月）　二〇一
五九　佐理の妻の出家（七月以降）　二〇六
六〇　兼家邸の近くへ転居（十月―十二月）　二〇九
安和元年
六一　木彫り人形（―一月）　二一〇
六二　文たがえ（三月）　二一四
六三　宵まどい（三月以降）　二一七

六四　登子と歌の贈答（五月―七月）　二一八
六五　初瀬詣で（七月―九月）　二二三

## 蜻蛉日記中

### 安和二年

六八　元日のことほぎ（一月）　二二五
六九　転居（一月以降）　二二九
七〇　三月の節供（三月）　二六一
七一　小弓の懸賞（同）　二六三
七二　高明配流（同）　二六四
七三　山寺の兼家（五月―閏五月）　二七〇
七四　病臥（閏五月）　二七二
七五　遺書（同）　二七五
七六　愛宮へ長歌を贈る（六月）　二八〇
七七　旧宅へ帰る（六月―七月）　二九二
七八　愛宮と歌の贈答（七月）　二九七
七九　屏風歌（八月）　三〇〇
八〇　積る雪に嘆く（八月―天禄元年二月）　三〇七

### 天禄元年

八一　内裏の賭弓（二月―三月）　三〇九
八二　松の露（四月―五月）　三一九
八三　実頼薨去（五月―六月）　三二一
八四　夜見ぬことは三十余日（六月）　三二三
八五　唐崎の祓（同）　三二四
八六　御禊の物見（九月―十一月）　三二八
八七　「かげろふの日記」　三三〇

### 三五

八八　兼家への歌（同）　三四〇
八九　軒端の苗の物思い（同）　三四二
八八　登子と歌の贈答（同）　三四三
八九　道綱、鷹を放つ（同）　三四八
九〇　盆供（七月）　三五一
九一　小野宮の召人（同）　三五二
九二　石山詣で（同）　三五五
九三　相撲のころ（同）　三七五
九四　兼家の狂態（八月）　三七七
九五　道綱の元服（同）　三八〇
九六　御禊の物見（九月―十月）　三八二
九七　大嘗会のころ（十一月）　三八四
九八　胸のほむらにわく涙（十二月）　三八七

### 天禄二年

九九　素通り（一月）　三九〇
一〇〇　木石のごとく（同）　三九五
一〇一　さむしろの塵（二月）　三九七
一〇二　憂き世の末（同）　四〇〇
一〇三　思わぬ山に（同）　四〇三
一〇四　父の家へ（三月）　四〇四

一〇五　長精進（四月）　四〇八
一〇六　夢の告げ（同）　四一〇
一〇七　菖蒲ふくころ（五月）　四一一
一〇八　里住みの悔い（同）　四一三
一〇九　世にある身の怠り（六月）　四一四
一一〇　問わず語り（同）　四一六
一一一　山寺へ（同）　四一〇
一一三　押し問答（同）　四一三
一一三　兼家への手紙（同）　四一八
一一四　山寺の閑寂さ（同）　四二〇
一一五　宿世の悲しさ（同）　四二一
一一六　妹の訪れ（同）　四二六
一一七　兼家の使（同）　四二九
一一八　動かぬ心（同）　四四四
一一九　兼家の手紙（同）　四四六
一二〇　諸方からの見舞い（同）　四四八
一二一　兼家との文通（同）　四五一
一二二　近親者の訪れ（同）　四五四
一二三　登子の手紙など（同）　四六一
一二四　道隆の訪れ（同）　四六三
一二五　父の迎え（同）　四六八
一二六　下　山（同）　四六九
一二七　帰宅した夜（六月―七月）　四七五
一二八　旧に変らぬ兼家（七月）　四七九
一二九　登子の手紙（同）　四八一
一三〇　その後の兼家（同）　四八七
一三一　初瀬の精進（同）　四八八
一三二　ふたたび初瀬詣でに（同）　四九九
一三三　あしたのかごと（同）　五〇五
一三四　よその村雲（七月―八月）　五〇六
一三五　晩秋悲愁（九月）　五〇九
一三六　霜の朝の嘆き（九月―十月）　五一一
一三七　あまがえる（十一月―十二月）　五一三
一三八　嘆きを尽す年の暮（十二月）　五一七


追記　五一九

口絵　蜻蛉日記絵詞書断簡――手鑑「藻塩草」所収――（京都国立博物館保管）

# 図版目次


音なしの滝　頁
逢坂山関址碑　六
勿来の関址付近（地図）　三
大井川　三三
横川中堂址　三五
「車寄す」　四九
帳台　五四
網代　六六
二階棚　七六
伏籠・火取　一〇五
八ヶ岳・若神子付近（地図）　一一一
尾駿付近（地図）　一一三
白河関址付近（地図）　一一五
にない・いただく　一一六
袈裟　一一三
雲林院　一一四
袿姿　一五六
双六　一六四
桟敷　一八三
泔坏　一八四
稲荷神社　一八八
下賀茂神社　一九二
瀬見の小川　一九六
上賀茂神社　一九七
村上陵　二〇四
うもるる山　二〇五
比叡山遠望　二〇八
宇治川　二一五
泉川と泉橋寺　二一七
金屋　二二〇
海石榴市観音の碑　二二〇
庶民の家　二二三
初瀬川　二二四
裳　二二五
唐衣・裳姿　二二五
長谷寺　二二六
長谷寺本堂から望む　二二七
狩衣姿　二二五
榻　二二七
愛宕山遠望　二二七
清水寺　二二七
荒木神社　二六八
紙屋川　二七〇
多武峯付近（地図）　二七一
藤原高光の墓　二七一
蔵王堂付近（地図）　二七四
金峰山寺の額　二七五
蔵王堂　二九五
十輪院　二九五
胡蝶楽　三一一
納蘇利の面　三一三
納蘇利の童舞　三一四
陵王の面　三一七
陵王の童舞　三一八
琵琶湖遠望　三二六
大津遠望　三二九
唐崎　三三三
走井　三三七
鷹屋　三三〇
石山寺　三三〇
瀬田川下流　三三六
佐久奈度神社　三三七
銚子　三三九
瀬田大橋　三四四
光孝陵　三四五
鳴滝　三四五
般若寺付近（地図）　三四八
般若寺碑など　三四九
軟障　三四三
背山　四四四
妹山　四四四
背山妹山付近と紀の川　四四五
春日神社　四四七
元興寺極楽院　四四八
十輪院　四四九
宇治川の鵜飼　五〇三

# 凡例

一　掲出本文について。

1　宮内庁書陵部蔵本を底本にした。そしてたとえば、

ゆくへも知らぬ
惜しからで
ものの要

とするのは、底本「ゆくゑもしらぬ」「おしからて」「ものゝえう」の仮名遣いを正したり、漢字をあてたりなどしたものであり、

あかつき
うらみ給ふが
世の中に

とした底本本文は、「あか月」「うらみ給か」「世中に」であり、「・」は「き」「ふ」「の」が底本にないことを示す。

十二月

のように（）で囲った文字は、私に施した訓みであって、「十二月」が底本の文字である。

歌の詠み人、詞や手紙の主の名、年が変るたびに掲げた年次の見出しなどは、私につけたものである。

2　底本本文は、古本系諸本すなわち甲類本と乙類第一種本とをもって校訂した上、校訂できない本文の欠陥については、写本・板本の書入れ、改訂本すなわち乙類第二種本と丙類本、注釈書その他に見える諸家の推測批判のよろしきに従って改訂し、時には私見による改訂も試みて、整定につとめ、その経緯は〔本文整定〕の項に略記した。

3　本文は便宜上段落にわかち、長い段ではさらに小分けをし、各段の初めに段序数を冠し、かつ検出に便ならしめんがために、その内容にちなむ見出しを横柱に掲げた。

一　本文整定について。

1　〔本文整定〕の項においては、古本系諸本により校訂した場合、左のごとき略号を用いた。

底　底本すなわち甲類第一種本たる宮内庁書陵部蔵本

Ⅲ　左記甲類第二種本に共通する場合。

阿　鵜飼五郎氏蔵阿波国文庫旧蔵本

松　松平文庫蔵本

上　国会図書館蔵上野図書館旧蔵本

久　大東急記念文庫蔵久原文庫旧蔵本

彰　彰考館文庫蔵本

井　無窮会文庫蔵井上頼圀旧蔵本

Ⅲ　左記甲類第三種本に共通する場合。

吉　吉田幸一博士蔵本

山　架蔵山脇毅博士旧蔵本

板　板本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

乙　左記乙類第一種本に共通する場合。
萩　東京大学付属図書館蔵萩野由之旧蔵本
見　日本大学付属図書館蔵松下見林旧蔵本
なお巻末歌集については左の二書も参考した。
傳　宮内庁書陵部蔵『傳大納言母上集』
道　宮内庁書陵部蔵『道綱母集』

2　改訂をした場合には、左のごとき略号を用いた。
㊤　前記吉田幸一博士蔵本の書入れ
彰　前記彰考館文庫蔵本の書入れ
㊂　上賀茂神社三手文庫蔵今井似閑書入板本
国　国会図書館蔵板本の書入れ若冲重好注
伴　東京大学付属図書館蔵伴蒿蹊校本
神　神宮文庫蔵板本謄写本の書入れ
久　前記大東急文庫蔵本の書入れ
宗　大東急文庫正宗文庫分蔵萩原宗固注稿本
静　静嘉堂文庫蔵山岡浚明書入板本
義　彰考館文庫蔵高田与清旧蔵源義亮奥書本の転写本
光　国会図書館蔵伊藤光中書入板本
解　坂徴『蜻蛉日記解環』
教　東京教育大学図書館蔵清水浜臣書写本の本文（乙類第二種本）またはその書入れ
直　無窮会文庫蔵伴直方書入板本
補　田中大秀『蜻蛉日記解環補遺』（仮称。未刊国文古註釈大系所収）
紀　田中大秀『遊絲日記紀行解』（未刊国文古註釈大系所収）
阿　前記鵜飼氏蔵阿波国文庫旧蔵本の書入れ
由　東京教育大学蔵横山由清書入板本
注　『全訳王朝文学叢書』第十一巻
講　喜多義勇氏『蜻蛉日記講義』
川　川口久雄博士『かげろふ日記』（日本古典文学大系所収）
原　原田芳起氏説（「平安文学研究」掲載論文その他）
校　喜多義勇氏『校註蜻蛉日記』
新　次田潤博士・大西善明氏『かげろふの日記新釈』
木　木村正中氏説（「国語と国文学」掲載論文その他）
索　佐伯梅友博士・伊牟田経久氏『かげろふ日記総索引』
全　喜多義勇氏『全講蜻蛉日記』

江戸時代に作られた改訂本や書入板本は右のほかにもあまたあるが、同一改訂案を記載した本の名を羅列する結果になるのを避け、そのうちの一本を提示したのである。その一本を選んだ基準は、その改訂案の最初の提唱者を窺い知り得ると考えられること、あるいは最初の提唱者が不明であっても、それへの距離が比較的近いかと考えられること、に置くよう心がけた。

3　本文整定処置は、原則的には単語単位や文節単位で示す方式をとらず、当該の文字について示した。

校訂の場合。たとえば、

さ皿―き

としたのは、底本「き」を甲類第三種本により「さ」と校訂したことを示す。

改訂の場合。たとえば、

る㊤―た。ろ→國ろ

としたのは、底本「た」を吉田本書入れにより「る」と改訂したことを示す。そして、底本「た」が生じた原因については、本書下巻付載解説に述べたごとく、誤写もしくは書体転訛である可能性、もしくはその関与している可能性が多分に察せられるので、考えられる誤写過程・転訛過程の一つの場合を、参考までに書き添えたのである。したがって、そうした誤写過程・転訛過程は、私に案じたものであって、右の例でいうならば、「る→底」は、吉田本書入れ注者の示したところではない。

ひ→へ。ひ→に→底へ

のように整定文字（この場合は冒頭の「ひ」）の下に拠り所を示していないのは、私見を用いた改訂である。

誤写過程・転訛過程の推測は凸版で示した場合もある。その場合、毛筆書体は、ことわりなき限り、底本を模写したものであり、ペン字書体は私に推測した誤写過程・転訛過程である。

なお、誤写の推測には誤写例に対する考慮があずかっているので、本書下巻巻末の「誤写一覧」をあわせ見ていただきたい。

4　底本はじめ古本系諸本には少数ながら空白を置いた個所がある。それらは□で示した。

5　本文整定に関し、さらに説明を要すると思ったときは、語釈の項に記した。

一　語釈および余説の項では、左のごとき略称を用いた。

解　環　坂徴『蜻蛉日記解環』
解環補遺　田中大秀『蜻蛉日記解環補遺』（仮称）
紀行解　田中大秀『遊絲日記紀行解』
全訳王朝　『全訳王朝文学叢書』第十一巻所収現代語訳
講　義　喜多義勇氏『蜻蛉日記講義』
道綱母　岡一男博士『道綱母』
大　系　川口久雄博士『かげろふ日記』（日本古典文学大系所収）
新　釈　次田潤博士・大西善明氏『かげろふの日記新釈』
全　講　喜多義勇氏『全講蜻蛉日記』
注　解　秋山虔・上村悦子・木村正中三氏『蜻蛉日記注解』（「国文学解釈と鑑賞」昭和三十七年五月以降）

一　本書の注釈原稿は昭和三十八年十月に脱稿、その形で昭和四十年八月から校正刷が出始めた。その間に思い得たことで、スペースの関係上織りこみ得なかったこと（他作品からの用例の提示が大部分である）は、「追記」として補い記した。

一　横柱には、記事年表の代りにもと思い、年月を記した。年号の記し方は便宜に従った。たとえば、正しくは「天暦十一年春」とすべき所を「天徳元年春」としたごとくである。

一　解説・誤写一覧・引歌一覧・和歌各句索引・語句索引・事項索引・系図・地図を本書下巻に付載した。誤写一覧以下のものについては、それぞれの所に別に凡例をつけた。

一　典籍の閲覧調査に際しては、御架蔵の方々、文庫・図書館当局の御厚情を忝くした。東京国立文化財研究所・京都国立博物館の方々の御厚意も銘記する所である。挿入した現地写真には、清水実氏の撮影をわずらわしたものが多い。深く感謝の意を表する。

# 蜻蛉日記

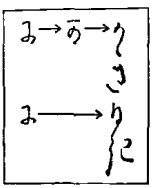
# 蜻蛉日記上

〔一〕　かくありし時すぎて、世の中に、いとものはかなく、とにもかくにもつかで、世にふる人ありけり。かたちとても人にも似ず、こゝろだましひもあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと、おもひつゝ、たゞふしおきあかしくらすまゝに、世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の、品たかきやと、問はむためしにもせよかし、とおぼゆるも、すぎにし年月ごろのこともおぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなむ、おほかりける。

〔本文整定〕　一　こゝろ恐乙（タダシ乙心ニ作ル）―ころ　二　る㊐―た。ろ→底ゝ　三　にき―かきひき。

第一図参照　四　か㊥―り。ゝ→底り

訳　紆余曲折した半生を過して、頼りなく、どっちつかずの身で暮している女がいたと思ってください。顔だちといったところで人並みでもなし、思慮分別があるわけでもなし、してみれば、御覧のように、なんの役にも立たぬていたらくで暮しているのも、むりはないと、思い思い、ただなんとなく、来る日も来る日も過す所在なさに、世間にたくさん出ている昔物語の片端などをのぞくと、ありふれた作りごとでさえ、ついてゆけないのに、なおのこと、ろくでもない身の上話まで書いたこの日記は、読んでいただけるかしら。世間の女から、家柄の高い殿方の生活はどんなふう？　と、きかれたら、これを前例にでもしてくれるように、と、そんな気持だが、それにしても、何年も前、幾月も以前のことは、うろおぼえなものゆえ、書かずともよいことが、たくさんまじりこんでしまった。



第1図

語釈　○**かくありし時すぎて**　「かく」は(A)「かく心あくがれて」（一九段二行）などのごとく先行文を受ける場合、(B)「かくぞある」（三段三行）などのごとく次に掲げる歌や文を指す場合、(C)先行文がなく、叙述者があるイメージを頭に持っていて、それを指す場合、すなわち、多く自身のがわの状態について、それをそれと明示せずとも読者または対者に察しがつくと予想している場合に使われる。ここ

は(C)。「かく言はせむと思ふこと」(三段一行)、「かく五月雨の音まさり」(七三段三番の歌)、「かく苦しうてなむ」(六三段三行)などの「かく」と同趣。「かく」を「すぎて」にかけず、より自然に「かくありし時」とひと続きに読んだ。「ありし」とあるから「かく」と指す内容は過去のこと。作者の生活を見聞したことのある読者なら「かく」にこめられた作者のイメージを具体的に受け止めることができたであろうし、われわれそうでない読者は、ここでは理解できないが、読み進んでゆくうちに、兼家の妻としての生活を指しているらしいと次第にわかってゆく。それが「すぎて」だから、今は作者の生活は別の局面に立ち至っているわけで、それを下文に記す。　○**世の中に**　「ありけり」へかかる。　○**ものはかなく**　はかばかしい境遇でないこと、頼りなく心細い身の上であることをいう。中止形。○**とにもかくにもつかて**　「つく」は付着する、落ち着くの意。諸注釈書は中途半端などっちつかずの状態でと解するが、具体的にいってどういうことなのかについては説くところがない。思うに、たとえば、准太上天皇の処遇をこうむった源氏が、秋好中宮に述懐した詞、「なににもつかぬ身のありさまにて」(『源氏物語』鈴虫)、すなわち、ほんとうの院というわけでなく、といってふつうの臣下でもない身の上で、といったのに似て、兼家の妻であるような、ないような状態で、のつもりと思われる。いいかえると、兼家との縁は切れていないから妻であることに相違ないが、兼家はかよってこないから妻ともいえないという状態をいう。作者の境遇がこういうにふさわしくなったのは、天禄二年(九七一)後半以後で、同年九月の条に「すべて世にふることかひなくあぢきなき心ちいとするころなり」(三五段八行)ともある。天延元年(九七三)末以後広幡中川の閑居中(一六段以下)なら、さらに確実にいえよう。　○**世にふる人ありけり**　「世に」は「ふる」にかかる、というより「世にふる」で一語のように使われている。「世」は世間の意、したがって「世の中に」「世に」と意味の類似した語があいついで現れており、書きことばとしての批評をするなら、推敲不足といえよう。大西善明氏(「平安文学研究」二〇)のいわゆる「重ねことば」、木村正中氏(「国語と国文学」昭和三十四年三月)のいわゆる「近接同語」で、『宇津保物語』その他ではしばしば見えるから、この当時のことばづかいのくせでもあろう。「ふる」は「世に経る古人」と掛詞のようにも見えるが、たまたまそう見えるまでで、掛詞とするには及ぶまい。「世の中」「世」は俗人の世界をも意味するから、裏から見れば、出家してもあながち不自然ではないが世を捨てずにいるという意がこもっているとも見られなくもあるまい。「世の中になほあらましかば(＝出家セズニイタラ)今は高き位にもなりなまし」(『宇津保物語』春日詣)。「人」は、作者自身のことを三人称形式で記したもの。本日記作者の姪の手に成り、述作者自身の身の上を記した日記という意味では本日記に似かよう『更級日記』の冒頭文も、同趣の三人称形式。「かくこもり侍りたる人」(『宇津保物語』吹上・上)の「人」も話者涼自身のことであるし、本日記にも同様の表現があるから、当時ふつうになされた言い方と思われる。しかしこれより下の文においては一人称形式に変る。　○**かたちとても人にも似ず**　南北朝時代に成った『尊卑分脈』には、この作者に対し「本朝第一美人三人(之一本)内也」と注する。もちろん文字通りには

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com